
きみと世界

柴石たくみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみと世界

【Nコード】

N7192Y

【作者名】

柴石たくみ

【あらすじ】

異世界『ユーフォリア』

そこは自然に囲まれた平和な世界。誰もが誰かのため生きており、自由を謳う。

しかしそれは10年前の話。現在は今まで通りの平和な日常を望む者たちと、平和な世界に飽きた者たちによる戦争の中だった。

主人公のシロウは平和を望む側の人間で、本人も戦争に参加する兵士だった。

戦の帰りに、激しい戦いのせいで崩れ去った小さな村の中で一人の

少女が倒れているのを見つけ、急いで治療をした。
やがて赤い髪の美しい少女は目を覚まし、その透き通ったアメジス
ト色の瞳でシロウを見つめ、そして呟いた。

「助けて」と。

第1話 それが彼女との出会い

この世界はユーフォリア。名もなき平和を好む女神が世界を創造したと伝えられている。

人が生まれてから今までの長きに渡り、戦争などは一切起きていなかったらしい。

皆が平和と自由を愛し続けていたからだろう。そんな彼らの中では戦争など、人間が最も愛すべき平和と自由を剥奪した愚かな行為だと思ったからだろう。

自分もそう思う。些細な喧嘩ならいいが、死人が大量に出る戦争に意味などないと。

そんなことを考えると、戦争を否定しているくせに戦争に参加している自分は愚か者だと感じた。

周囲の地面には味方と敵の死体が大量に散らばり、魔法によって焦げた地面を血や飛び散った皮膚が汚していた。先ほどまでここでは小さいものだったが反乱軍との戦闘があったのだ。

結果はあちら側の敗退。残党はさっさと去ってしまったため追いかけるにも見失ってしまった。

数日前まではこの場所は自然に囲まれた美しい村だった。一週間前あたりにここの酒場で村人と一緒に歌って踊ったりしながら酒を飲んでいた。

この村は大都市が近かったため人の通りも多かったし、夜になると酒場が賑わっていたものだ。

この世界には「大都市」と呼ばれる巨大な街が存在する。本来ならば村や小さな町などの集落で暮らすのだが、この世界は広すぎる。物流などをやりやすくするためには巨大な街が必要だったのだ。

そのため、あらゆる方角に複数の大都市を建築して小さな村や町から採れた野菜、果物、穀物、肉などを一部だけ大都市に集め、大都市から別の大都市へと運んでいくのだ。村や町が一方的に大都市に物資を送り続けるのはかなり不平等だ。それを補うために大都市は加工した布や服、耕作に必要な道具などを村と町に支給するというシステムをとっている。もちろん村の中には酪農や農業に向いてない地域がある。そういった場所は鉱山に頼ったり、海から捕れる魚などに頼るケースがある。

こういった物と物を交換しあっていくことを交換制と呼んでいる。貧富の差は多少出てくるものの、とりわけ目立ったものではない。そうやってくることで世界は平等であり続けている。

ただ、ここ数日戦争によってそのしくみは少し足枷になってきている。

兵士たちに分け与える食料と武器や防具が大量に必要なため各村や町からいつもより多めに食料や鉄などを取り寄せたため、その交換に必要な服や道具も大量に用意しなくてはいけなくなってしまうため用意しきれず、今は村と町に物資の支給を待ってもらっている状態だ。

この商品の交換制というのは緊急時にはとても大変だということで、各大都市で交換制に代わる新しい制度を考案中らしい。

この前先輩の兵士がそう話しているのを聞いただけが。

「シロウ。どうかしたか？」

無意識にぼーっとしていたのだろう。近くにいた先輩の兵士が声をかけてくれた。

「え？ ああ、なんでもないです。すみません」

「いや、謝らなくていいよ。ここんとこ休みなしだもん。疲れてぼーっとしちゃうのは当たり前っしょ」

気さくに話しかけてくれるこの先輩はカナタさんだ。

背が高く筋肉質だが誰とでも元気に話せて、さらさらの金髪を持ち主……とまで聞けばすごいかわいいい人を想像する人も多いと思う。現に今まで女の子にそういう説明をしたら「カッコイイー！」と言って騒ぎ始めていた。

だが、顔面が酷く残念な人である。輪郭的には確かに整っているのだが。極端に細すぎてちゃんと開いているのかすら怪しい目は気が抜けているのかと勘違いしてしまうくらい垂れており、口は猫を簡略化して描いたとき見たいな感じになっている。顔面を隠せばかっこいいのになと何回考えたことか。

だが、性格はいい人である。決して人に上下はつけないし、俺が困っている時は文句を言いながらも積極的に助けてくれる。女性との付き合い経験はゼロみたいだが、彼が今までしてくれた女性の話はすべて内面重視の話だったので人を見かけで判断する人ではないとわかってる。……多少女の子の胸ばかりを見る傾向にあるが。なんだかんだで自慢できる先輩だ。弓の扱いと罫系の魔法の扱いは誰よりも上だ。

「嫌ですよ。飽きたからって理由で戦争なんて」

「本当だな……この村の酒場で飲む酒はうまかったんだけどなあ」

残念そうに言いながらカナタ先輩は傷ついた味方の兵士に傷薬を渡しにいったしまった。

自分も村の中に生存者がいないか確認しに行く。

すっかり焼け落ちてしまった屋根や木の柱を見ると悲しくなってきた

た。

たしか村の入り口付近には村長が住んでいる大きな木造の家があり、その向かい側にはいつも飲みに来ていた酒場があったのだ。

酒場はだいぶ古かったが、そのぶん中は活気で溢れていて笑い声が絶えない場所だった。

なのに今は静まりかえりほぼ焼けてなくなっていて、割れた酒瓶や食器が木の破片の隙間から見えた。

泣きそうになるのを我慢して落ちた屋根の隙間などを見ていく。だが見つかるのは村人の息絶えた姿だけである。やはり生存者はいないかと思い帰ろうとしたときに木片の隙間から見える白い手が微かに震えた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192y/>

きみと世界

2011年11月21日16時20分発行